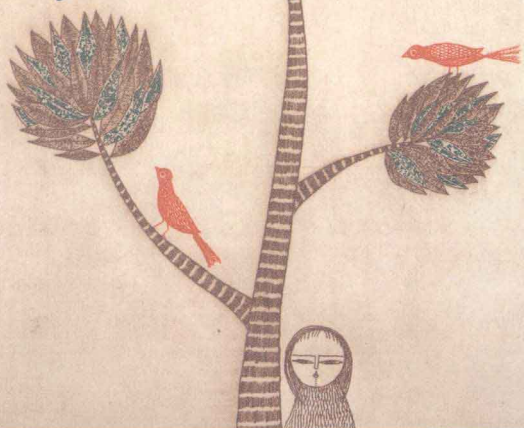


狸の幸福

夜明けの新聞の匂い

曾野綾子



新潮社

狸の幸福

夜明けの新聞の匂い

曾野綾子

新潮社



狸たぬきの幸福こうふく
夜明けの新聞よあけのしんぶんの匂におい

著 者 曾野綾子（そのあやこ）

一九九三年七月二十五日 発行

一九九三年九月二五日 三刷

発行者 佐藤亮一

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七一番地

株式会社 新潮社

電話 営業〇三（3266）五一一一 編集〇三（3266）五四一一

振替 東京四一八〇八

印刷所 株式会社光邦 製本所 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示しております。

© Ayako Sono 1993 Printed in Japan

ISBN4-10-311410-X C0095

狸の幸福

夜明けの新聞の匂い*目次

I

梅と障子 8

踊っている場合か 15

国会周辺春の軽さ 21

二日間退位した王 29

老年は資格か 36

詩人の本質 45

食べられるロココ 53

絶品の絶版 62

夜はアフリカの休息 69

苦労死 78

猫を噛む鼠たち 88

II

「敵には一度、友には常に」

星の降る野

108

「拙速は巧遅に勝る」

116

樹上の蘭

125

自然主義の本質

134

与える者の光榮

142

ガスパチヨの残暑

148

秘し隠した空間

155

すっかり嬉しいトレンディ

163

誓う権利は国家にあるか

171

ワグナー 生きる喜び

178

III

戦う市民たち

188

馬を愛した二人

196

ぷつつん

206

希望の治癒力		216
賢い選択	224	
狸の幸福	232	
最後のオコゼ	240	
南ア瞥見(1)	248	
南ア瞥見(2)		258
シペレレの悲しみ		
競馬の時代	266	
密かに静かに、自分らしく		275
無限の支持	283	

狸の幸福

夜明けの新聞の匂い

梅と障子

昼型の私は、朝ほど元気がいいので、朝のうちだと非常に根拠がない主観的なことで、説明がむずかしいことでも書いてみようと思う。しかし夕方になると、しよぼくれて来て、そんな余計なエネルギーを使うことはやめて寝てしまおうと考える。

私の『神の汚れた手』という小説が今度英語に翻訳された。

自作が翻訳されることに大変熱心な方もおられるらしいが、私は今までそのためにいささかの努力もしたことがなかった。

一つは翻訳というものが、どこまで原作を伝えるか、よくわからないのである。もう一つは外国語に翻訳された場合の、出版部数のあまりの少なさをいつか聞かされてびっくりしてしまったからである。日本で大変有名な方の作品が、初版三千部、五千部、ということもあるという。

もちろん、作品のよさは売れる部数とは釣り合わない。しかしビジネスとしたら、三千部や五千部は、学術出版の部数ではないかと思う。英語を話す人たちは世界で四億くらいはいるのではないかと思うが、ほんとうに本を読まない人たちが多いものだと思う。それに何ごとも無理はしない方がいい

というのが、私の気持ちなのだが、今度の本の場合は、早々と翻訳してくださったアメリカの大学の先生がおられた。それで私の作品も目の目を見る幸運を頂いたのである。

しかし本が完成する途中にも、私の驚きの種はまだ続いた。

たとえば作品の中に浜木綿^{はまゆう}という植物が出て来る。それを他の植物に変えてほしい、馴染みのない植物は困る、というのである。

私たちにとってマロニエなどという木はあまり馴染みがない。でも、私たちは何とかマロニエを理解しようとして来たのである。

人の名前についてもむずかしくて覚えられないのは変えてくれという要求があった。たとえば淑子と艶子はだいたい印象が違うが、そんなことはまあ大したことではない。「はい、かしこまりました」とさっさと変えることにしたが、ラスコーリニコフなどという名前も日本人にとって覚えるのに易しい名前ではなかったのである。しかし日本人は「舌を噛みそうな」そういう名前を何とかして覚えようと努力したのである。

本になった後、作者のデータをほしいと言われた。端的に言うとう、私が自分で宣伝用のデータを作ることになるのである。

私はそういうことに対して、頭を切り換えて自己宣伝をしなければならぬこともよく知っている。外国の新聞記者のインタビューを受けて「あなたは成功した作家ですか？」などと聞かれた時、日本風に羞じらって、

「いいえ、とんでもない。私などやっとうにか書いて来たのです」

と日本語のニュアンスで答えたでしょう。

この答えは別に度はずれた謙遜でもない。誰でも楽々と書いているわけではないし、人に言わない内面の迷いも苦痛もあるものだし、一つ書き上げる度に「やれやれ」と思う面は誰にでもあるのではないか、と思う。迷いや苦痛を詳しく人に言わないのは、見栄を張って秘密にしているのではない。自分の苦労など、一々人に話すのは甘えだと思うからだし、第一、成功した、というのは、誰と比べて、どんな面で、成功したと言うのかわからないからである。収入でか、知名度でか、売上部数でか、賞の数でか、ゴシップ性でか、文芸時評で取上げられる頻度でか。これら総てにいい点を取る作家はいないから、みんな答えに困るだろう。

しかし私がその外人記者に、言ったことをそのまま訳されると、「ASは今でも作家として食べて行くのは苦しい。自分の本は売れないし、才能はないし、生きて行くのがやつとだ、と語った」となるかもしれないのである。これも不正確ということになるだろう。

昔、私の作品が初めて映画になるかもしれない、ということになった時は嬉しかった。いささかの虚栄、私の作品の主人公を美男・美女の俳優さんが演じてくださるといふ晴れがましき、それから何と言っても原作料という名の不労所得をもらう嬉しき、が渾然としていた。原作料が幾らかということとは、一番大きな関心だった。もちろん高ければ高いほどいい。しかしあの程度の作品が原作として果たして何十万円もの価値があるのだろうか、という屈折した心配もあった。

その時、私の唯一の恩師と言うべき臼井吉見先生が言われた。

「原作料というのは、貞操蹂躪料ですからね。たくさんもらいなさい」

日本の作家の中には、自分の原作の映画は見ないとおっしゃる方もいられる。つまりテレビや映画になる、ということは、金銭的には確かにトクをすることなのだが、それは別に誇るべきことでも何でもないということだ。

しかるにアメリカではそうでないらしい。

私の本の面倒を見てくださった日本人スタッフは、

「どうぞがんばって、どんなに自分が美人で秀才で日本一の人気作家かというふうにお書きになってください」

と笑って言われたから、私も「ハイハイ、入れ歯をしつかり抑えて書きましょう」と答えた。私は歯だけはまだ自前なのだが、宣伝文を自分で作るのは「歯が浮く」という感じになってしまうからである。

売れた本の部数も書いておくべきらしいから、私はその日までに実際に出版社が出した部数を正確に調べて報告した。他にどういう団体に属しているか、どういう有名な知り合いか（これは本を送って批評してもらうため）、嘘ではないのだから隠しておくこともないのだけれど、今まであまり人にも言わなかったような過去のできごと、まで書くことになった。私の日本人としての感覚では、お世話になった以上、本が売れないと申し訳ないから、少しは協力するのも当然と判断したからなのである。しかしおかげで、私の美学はすっかり狂ってしまった。聖書にだって日本人的な美学はある。「右手のすることを左手に知らせてはならない」というのがある。「勝手にさせておきなさい」というのは、イエスの好きな言葉だが、口出しせず黙ってことの成り行きを任せる日本的な好みに近い。

かつてルース・ベネディクトは『菊と刀』の中で、日本人の「恥の文化」について語った。自分がこのことについてギルティ「罪」を感じるかどうかではなく、他人がどう思うか、というシェーム「恥」の概念が日本人を支えているという論拠であった。

しかし「恥」と「羞じらい」はかなり違う。「恥」は私の行動を実際に見ている人を対象にしているが、「羞じらい」はたった一人でも感じるものなのである。日本とアメリカとの間で摩擦があるのは、貿易収支だけではない。アメリカ人には必要ないと思われるかもしれないこの羞じらいなどというものが、アメリカ社会では全く問題にされない、ということも相互の理解を妨げている大きな要素だろう。

そう思っただけでみると、菊という花にはほとんど羞じらいがない。もう一度どなたか日本人が、今度は『菊と刀』ではなく、『梅と障子』というような視点から日本人論を書いてくださると、少しは効果があるかもしれない。梅も障子も、羞じらいの産物だ。そして私はもうこの次からは、どんなに本が売れなくても、自己宣伝はやめることにしようと思っている。

夜明けの新聞の楽しみの一つは投書を読むことだが、二月二日付けの朝日新聞に東京都の須永成哉さん（英語教師31歳）という方が次のような投書を載せていらつしやる。本島長崎市長の狙撃事件（かねて昭和天皇の戦争責任について発言していた同市長が、一月十八日、市庁舎前で右翼の男に撃たれ重傷を負った事件）に触れて、「人が思うことを率直に述べれば、必ずある人の反感を買う。これは言論の自由以前の、ありふれた日常生活の中にもある。人の思惑、身の保身のために、私は、いつも正直にものを言えたことがない。他人の目に、言葉にびくびくする。そんな者が今回、言論の自由といつて聞えない

のは致し方ない。(中略)

私は、こわくて、こわくて何も言わないことにしている。言論の勇氣は、私たちにこそ必要なのだ」

こういう投書ほど、理解に苦しむものはない。何をおっしゃろうとするのかもろんはつきりはわからないが、天皇に戦争責任ありと考える人も当然いるし、天皇制反対を唱える人がいても珍しくない世の中である。

しかし「正直にものを言えたことがない」などという人は私の回りにはまず見当たらない。現在の日本の社会が「こわくて、こわくて何も言わないことにして」いなければ生きていられない状況だというのも、かなりオーバーである。人を殺す暴力は、右も左もやって来たが、国民の大多数はそれにはつきりと反対している。非暴力主義は日本で少数派どころか、むしろ圧倒的多数なのである。

むしろこれくらいの日本の社会で「正直にものを言えたことがない」という弱い方が教員をしていらつしやることの方が、問題ではないだろうか。いや、私が不思議に思うのは、この方は既に投書というはでな形で、自分の意見を言っておられるのだ。それが「こわくて、こわくて何も言わないことにしている」方のことだろうか。最近は何が怖がつてみせることが流行になっている。「中国では子供の眼が輝いている」と書くのが流行だった、あの恐ろしい文革の、思想統制の最も厳しかった時代とよく似ている。

一月二十七日の産経新聞に「成人式出席の友にがっかり」というなかなかの名文が載った。筆者は大阪府豊中市にお住まいの会社員・伊藤博美さん(19歳)である。

伊藤さんが成人式に出ると、ひさしぶりに会った女友達はタバコをプカー。「君が代」斉唱の時は、みんな歌を知らないで、静聴だけ。免許とりたての人は、乗って来ないでくださいという会場に平気で自家用車を持ちつけ、もらった記念品を箱も開けずにごみ箱に棄てた人がいた。それは、手作りの筆箱だった。伊藤さんは「こんな二十歳には絶対になりたくない」と書く。いいお嬢さんだ。

これで読むと豊中市という所の教育はかなり荒れているらしい。前にも書いたが、私は「君が代」という曲があまり好きでないで、できれば他の曲に変えてほしいとも思うのだが、国歌を知らない二十歳を世間に送り出す教育は、世界的な常識からいうと、非常識に入るだろうと思う。しかしわずかなスペースでこの事実を描写した伊藤さんのみごとな筆力を思うと、国語教育には希望がもてる。全部悪いということもない。全部いいということもない。